

論文の内容の要旨

氏名： 山村結花

博士の専攻分野の名称：博士（総合社会文化）

論文題目： グレアム・グリーン文学における表象の研究

本研究の目的は、グレアム・グリーン（Graham Greene, 1904-1991）の小説世界を構成する諸要素のうち、事物による表象に着目し、その特徴を明らかにするとともに、いまだ十分に研究されていない1980年代に公刊されたグリーン晩年の三作品を、これまで特に注目されることの無かった事物による表象の観点から新たな解釈を試みることにある。

グリーン文学における際立つ特徴の一つとしてこれまで論じられてきている、グリーンが描く悪に着目して作品を読み進めていくと、その作品世界には、登場人物による飲酒行為が頻繁に描かれているだけでなく、登場人物が所有する様々な事物や、彼らとかわりをもつ動物が用いられているというもう一つの特徴が見えてくる。だが、グリーン作品におけるこうした登場人物の飲酒行為や様々な事物に着目し、表象の観点からグリーン80年代の三作品を徹底解釈し、さらに、他の作家の作品における登場人物の飲酒行為や事物にも着目し比較考察することで、グリーン文学における表象の特徴を明らかにした論考は、筆者の知る限り見当たらない。したがって、この新研究は、グリーン晩年の三作品の新たな解釈の鍵を提示するだけでなく、今後の国内外のグリーン研究を一步進めることに貢献できるのではないかと筆者は考えている。

そこで、本研究では、川口喬一、岡本靖正編『最新 文学批評用語辞典』（研究社、1998年）の解説を基に、文学における「表象」の定義を以下のように確定した。①「表象」とは、美学的・記号論的意味において、a. 作り手——受容者という表象行為のコミュニケーションに関わる軸、b. 表象するもの——表象されるものという表象の対象、様態、物質的手段に関わる軸、という二つの軸によって成り立っている。②それ自身以外の何かを表象するもの、通常、慣習的にそれと関連して思い浮かべる何か。

本論文の各章の内容は以下のとおりである。

序論においては、二十世紀のイギリス小説の特徴を簡潔に概観し、本研究のテーマ選定の理由・根拠、研究方法を提示し、研究の意義を述べる。

第一章においては、国外、国内双方における先行研究を総括する。

国外では1950年代からグリーン研究が盛んとなった。わが国においては、1945年以前の戦中と戦前には記録として残るグリーン論文・記事は見当たらないが、すでに、グリーン作品は映画関係者のあいだで読まれていた。その後研究は進展したものの、2000年に入り特に目立った研究書は出版されていない。国内外ともにその先行研究において論考の中心となるものは、プロットや語り、あるいは、登場人物に着目した作品論や、宗教論、政治論である。

第二章「西洋における悪」においては、グリーンが執着して描き続けた悪を理解するにあたり、西洋における悪を確認する。

本来、根源的悪とは、ヘブライ・ユダヤ教における神との関係の破綻（神との契約違反を含む）であったが、新約聖書においては、悪はキリストの拒否として提示されている。20世紀の大戦で全体主義支配による記憶の抹殺という巨大悪が誕生したことで、キリスト教思想における「悪」とは、個人の道徳的悪であり、黙示録的で超自然的な悪である、という包括的なものとして捉えるべきものとなっていく。また、聖書に描かれた悪とは「完璧であった人間の、神への不服従、傲慢、責任回避、すなわち、神への逆行行為」であるとされる。

第三章「グリーンランドにおける悪」においては、前章までを踏まえ、「グリーンランド」と呼ばれるグリーン作品世界に描かれた悪について検証する。

グリーンは、この世は善と悪から成り立っていないが、善であっても邪と見なされ、悪であっても正と見なされる領域の存在を描く。このように善と悪を容易に区別できないものとして描くグリーン自身にとっての悪とは、人間に課された責任を回避する行為であることが導き出される。「グリーンランド」の風土がもっとも鮮明に描かれた『ブライトン・ロック』と、その素描であるグリーンの短篇小説「田舎ヘドライブ」には、悪とかかわりを持つ①登場人物の飲酒行為、②車、③動物、④凶器・危険物という四つの事物が用いられ、これらの事物は「グリーンランド」における悪を表象している。

第四章においては、グリーンの作家活動において転機となった作品と言われる『叔母との旅』(*Travels with My Aunt*, 1969)における悪を表象する事物に着目し、この物語に見られる様々なイメージが、なぜ負から正へと転換されるように読者に受け止められるのか、本作品における事物による表象との関連においてその理由を分析する。

物語における様々な植物や自然に、語り手であるヘンリー (Henry) の理想的経験を表象させ、それらに「イメージの強調」としての機能ではなく「イメージの抑制」としての機能を担わせることで正のイメージを与える。また、登場人物と犬とのかかわりに彼らの悪が描かれながらも、ヘンリー自身が正の印象を得ていることを通し、読み手はこの物語を正のイメージとして捉える。くわえて、この物語自体が、オーガスタ (Augusta) が話し手となるメタフィクション構造であるゆえに、悪のイメージが抑制され、むしろ、ユーモアを喚起することが明らかとなる。

第五章から第七章においては 80 年代の三作品を徹底解説する。

第五章は『ジュネーヴのドクター・フィッシャーあるいは爆弾パーティー』(*Dr. Fischer of Geneva or The Bomb Party*, 1980) の解説である。

この物語において特に際立つ事物は、アンナ・ルイーズ (Anna Luise) のセーターである。彼女の真っ白なセーターが事故による出血で真っ赤に染まり、マホガニー色の美しい髪が、包帯を巻かれ真っ白く見えることで、彼女が負った怪我の重傷度が示され、事故によるアンナ・ルイーズのセーターの色の変化には、幸福であった夫アルフレッド・ジョーンズ (Alfred Jones) が不幸に転落するこの物語の分岐点が表象されている。また、この物語における登場人物の飲酒行為や様々な事物には、登場人物の人間性、ならびに、善と悪、悪の横行とそれを見逃す人々と社会、という物語のテーマが表象されている。

第六章は『キホーテ神父』(*Monsignor Quixote*, 1982) の解説である。

この物語において、聖職者用の衣類であるソックス、ビブ、カラー、ならびに、キホーテ神父 (Monsignor Quixote) の愛車ロシナンテ (Rocinante) には物語展開における様々な分岐点が見て取れる。また、警察に追われ、傷つき、廃車同然となってしまった愛車ロシナンテには、キホーテ神父の死という結末が表象され、キホーテ神父とサンチョ (Sancho) による飲酒行為には互いの友情の深まりや親密度が表象されている。二人が赤ワインを飲みながら繰り広げる議論が信仰、教義、思想に関するものであるのに対し、白ワインを飲みながら繰り広げる議論は、神父自身の社会学や政治論である。

この物語に描かれた善からの逸脱と見なされてしまうキホーテ神父の行為に、読み手は完全なる悪を見出すことはできない。むしろ、純粹、敬虔、無垢であるキホーテ神父が、聖職者としての責務を理解し、自らの責任を果たそうと最後まで努めようとした姿が浮き彫りにされるとともに、この世に生きる厳しさと人生の空しさ、さらに無垢であることの怖さが鮮明となる。

第七章は『キャプテンと敵』(*The Captain and the Enemy*, 1988) の解説である。

スモーク・サーモンとオレンジ・エイド、パジャマ、パン、飛行機、手紙、という事物、さらに、キャプテン (Captain) とジム (Jim) のウィスキー飲酒行為には、登場人物であるキャプテンとジム双方が負う「責任」と、彼らの「罪」・「悪」が表象されている。この物語は、一見するとグリーンが宗教意識が表立っておらず、そのテーマがグリーンが幅を広げていると解されがちである。しかしながら、この物語における表象に着目することによって、登場人物が負う「責任」と彼らの「罪」・「悪」、ならびに、その「責任」を回避した、あるいは、全うできなかったことから彼らの関係性が崩壊し、自滅を呼び寄せるように見える者たちの姿が見て取れる。

第八章においては、グリーンが批評した、あるいは、グリーンと比較されることが多い五人の作家 (R. ハガード、M. ボウエン、E. ウォー、H. ジェイムズ、S. モーム) の作品における登場人物の飲酒行為や様々な事物とこれまで検証したグリーンが作品におけるそれらに着目し、表象の観点から比較考察する。

グリーンが作品における登場人物の飲酒行為や様々な事物には、ほかの作家たちの作品におけるそれらより多種多様な表象の機能があり、悪が関連付けられている。これは、他の作家たちの作品には見られないグリーン文学における特質であると見なし差し支えないであろう。

グリーンが作品において、登場人物の飲酒行為、乗り物、動物、凶器・危険物は、悪を表象する機能を果たし、「グリーンランド」の主要構成要素となっている。しかし、80 年代の三作品においては、動物は用いられておらず、その他の様々な事物が用いられている。これは、時代の変化に伴う住居環境や衛生環境の変化の表れであると解される。そして、これらを表象の観点から検証することで、時代、世代、環境が変化しようとも、責任の回避・放棄こそグリーンにとっての「悪」であることが導き出される。

グリーンが作品のテーマは、時を重ねるにつれ、宗教よりも政治や情勢を色濃く描き出すものへと傾斜し

ていったと考えられる傾向にあった。しかし、本研究により、「責任」と「悪」の問題こそ、彼の作家人生における一貫したテーマであることが明確になり、このテーマには彼の信仰心や世界観を見出すことができる。

グリーン文学の解釈は容易ではないが、本研究はグリーン文学の核心を捉えるうえでの一つの鍵となり、これまで注目されることのなかった魅力の一端を提示し得たのではあるまいか。